

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01876

研究課題名(和文) 東南アジアにおけるカウンター・エリートの登場と体制変動

研究課題名(英文) The Rising of Counter-elite and Regime Change in Southeast Asia

研究代表者

外山 文子(坂野) (TOYAMA, Ayako)

京都大学・東南アジア地域研究研究所・連携講師

研究者番号：50748118

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：21世紀の東南アジア諸国では、強力な政治指導者が多数登場してきた。彼らは選挙により選ばれたという正当性を持つにもかかわらず、強権政治を批判されてきた。本研究では、タイのタクシン元首相、フィリピンのドゥテルテ大統領、マレーシアのナジブ元首相、インドネシアのジョコ・ウィドド大統領に焦点を当て比較検証を行った。比較検証の結果、タイ、フィリピン、インドネシアでは、新しい政治指導者たちが、有権者の民主主義や法の支配への失望を背景に政治権力を掌握したが、既存のエリート層から強い反発を受け、結果的に一層強権化していったプロセスが浮かび上がった。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the emergence and end of powerful political leaders in Southeast Asian countries and compare and examine their common points and differences in the political regime that produced them. In the Southeast Asian countries of the 21st century, many powerful political leaders(Strongmen) have appeared. Despite having the justification that they were elected by elections, they have been criticized for their authoritarian governing style. In this study, we focused on Former Prime Minister Thaksin of Thailand, President Duterte of the Philippines, Former Prime Minister of Malaysia, Najib of Malaysia, President of Indonesia Widodo, and conducted a comparative examination. Our analysis shows that new political leaders could grab political power against the background of voters' disappointment of the rule of law and democracy. However, because of strong opposition from existing elite groups, they became authoritarian gradually in order to counter the old elites' attack.

研究分野：タイ地域研究 比較政治学

キーワード：強権政治 ストロングマン 民主主義 法の支配 ポピュリズム 対抗エリート

1. 研究開始当初の背景

体制変動と政治指導者やエリートとの関係については、1960年代頃から注目を集めてきた古くて新しい問題である。体制変動の要因として、早くから社会構造の他にエリートの役割が重要であることが指摘されてきた。安定的民主主義体制の達成は、国家的エリートの合意的統一 (consensual unity) に大きく依存しており、エリートが団結していない限り、政治体制は不安定なものとなるという見解である (Higley and Burton “The Elite Variable in Democratic Transitions and Breakdowns”, 1989)。この議論は、1950年代から1960年代初頭に民主化したラテンアメリカ諸国などが、1960年代半ばには再び権威主義体制に取って代わられた民主主義の崩壊 (democratic breakdowns) に関する研究から導き出されたものである。

近年は、エリートの民主化に対する否定的な影響について焦点が当てられるようになった。アセモグルとロビンソンは、西欧やラテンアメリカ諸国の経験に基づき、豊かなエリートによる再分配を制限したいという欲求が非民主主義体制へと方向転換させることを明らかにした。つまり民主主義は再分配的であるが故に定着せず、エリートに対しクーデタ起こすという動機を与えてしまう。その結果、政治体制は民主化と権威主義化の間を揺れ定着しないとされた (Acemoglu and Robinson “A Theory of Political Transitions”, 2001)。

このように、選挙の実施を伴う民主主義体制への移行を巡っては、利権を死守しようとする既存エリートと、民意を背景に既存の政治制度に対して挑戦を挑むカウンター・エリートの登場について明らかにされてきた。しかし、多くの既存研究は、ラテンアメリカ諸国の政治研究から誕生したものである。

他方、日本との関わりが深い東南アジア諸国に目を向けると、21世紀に入り民主主義の後退について、頻繁に指摘されるようになってきている。東南アジア諸国においても、エリート間の衝突が菅申される。しかし、その背景や政治的動態については、学問的見地からの詳細な研究が進んでいない状態である。

2. 研究の目的

上記のような状況を受けて、本研究では、21世紀に登場した東南アジア諸国の新しい政治指導と既得権益層との争いについて「カウンター・エリート」との視点から比較検証を行うこととした。

本研究は、タイ、マレーシア、フィリピン、インドネシアの東南アジア4か国を研究対象とし、エリート間の対立が政治体制の変動にどのような影響を与えるのかについて説明をすることを狙った。

現在、東南アジア諸国では、軍政のタイを除く殆どの国で選挙が実施されている。しかし近年、同地域の民主主義の後退が注目を集

めている。政治指導者は選挙によって選ばれているにも拘わらず、「開発独裁」さながらの強権的な政治がおこなわれており、政治的権利や市民的自由が制限されていることが指摘されている。

また多くの新しい政治指導者は、伝統的エリートの外から登場しているため、幾度も深刻な政治的危機を経験している。それは、国王 (スルタン)、議会、裁判所、官僚との衝突などである。彼らは選挙での勝利 (垂直アカウンタビリティ) を協調し、これらの危機を乗り越えようとしてきた。しかし、タイのタクシンは国王や官僚との衝突を収めることに失敗し、最終的には裁判所によって政治生命を絶たれた。他方、フィリピンのドゥテルテは、現在のところ、既存エリートなどとの衝突による政治生命の危機は訪れていない。

本研究では、これらの相違点を生じさせた各国の政治制度の違いについて考察することにより、民主化途上国において体制変動を引き起こす要因について検証を行うこととした。

3. 研究の方法

本研究では、主に次の4点の解明を目指す。

- (1) 強力な政治的リーダーシップを発揮しえる政治指導者を誕生させた制度設計の特徴
- (2) そのような制度設計を生み出すこととなった政治体制と既存エリートの思惑
- (3) カウンター・エリートと既存エリートの衝突が生じた原因。特に政権の政策と、それに対する国王、官僚、司法の反応に焦点を当てる。
- (4) カウンター・エリートと既存エリートの衝突が生じた際の、カウンター・エリート側の対応

4. 研究成果

3年間の共同研究の結果、上記4点のポイントのうち、(3)(4)を重点的に検証した。また研究を進めていく中で、マレーシアの事例が「カウンター・エリート」とは言い切れないことが明らかとなってきたため、研究の切り口を、強権的指導者「ストロングマン」に途中で変更し、引き続き検証を行うこととした。

切り口をストロングマンに変更し、タイのタクシン元首相、フィリピンのドゥテルテ大統領、マレーシアのナジブ元首相、インドネシアのジョコ・ウィドド大統領を比較検証したところ、以下の点が浮かび上がった。

(タイ：タクシン元首相)

タクシンは、2006年9月のクーデタにより政権を打倒されたが、10年以上も経過した現在でもその政治的影響力を恐れられ続けている。その理由の1つは、タクシンの「ポピュリズム」にあると論じた。本研究では、ポピュリズムを動的に捉え、タクシンのポピュリズムが、伝統的エリートによる攻撃

に対する反発として登場し、次第に強化されていった経過を描いた。また 2006 年クーデタ後は、彼のポピュリズムが大衆デモに直接介入したことにより、反タクシン派のデモ隊や軍隊との衝突が起こり多数の死傷者を出してしまった。同時に政党とデモ隊との間の境界線も曖昧になった。これらにより、民主化を巡る対立軸が複雑化し、最終的に民主主義的統治の原則に対するコンセンサスが失われ、民主化を一時停止させてしまったと結論付けた。

(フィリピン：ドゥテルテ大統領)

ドゥテルテは麻薬戦争による多数の死者を出したにも拘わらず、なぜ高い支持率を維持できるのかという問いについて分析を試みた。本研究では、インターネットを通じて共有された「都市伝説」により、ドゥテルテが正義を実現する「義賊」として構築されたと論じた。そして実際には、麻薬戦争の犠牲者の殆どが貧困層であるにもかかわらず、罰せられているものは「不道德な他者」であり、「善き市民」である自分たちは救われていると考えているため、強権的な麻薬戦争を容認していると指摘した。しかし同時に、ドゥテルテの正統性は合法性に基盤をもたないため、義賊的道德への信頼が失われれば深刻に損なわれることになるとして、強権的支配が孕む危うさについても指摘した。

(マレーシア：ナジブ元首相)

現在ナジブは、国際的な汚職スキャンダルにみまわれている。ナジブの個人口座に、財務省傘下の国営投資会社のワン・マレーシア開発公社(1MDB)の資金 7 億米ドルが流れたとされる疑惑である。汚職疑惑は国内問題に留まらず、アメリカ司法省を筆頭にシンガポールやスイスなど複数の海外捜査機関が 1MDB の捜査を続けている。マレーシアは 2018 年 5 月に総選挙が実施された。結果的にはナジブは選挙に負けたが、大方の政治アナリストや研究者は、ナジブの率いる与党 UMNO および UMNO を中核政党とする与党連合の国民戦線(BN)の勝利を予想していた。なぜナジブの地盤は盤石だと予想されていたのか。本研究では、首相に強力な権限を付与する制度と、巧みな野党切り崩し工作から分析を行った。なお、ナジブ敗戦の原因については、今後の研究課題とする。

(インドネシア：ジョコ・ウィドド大統領)

2014 年に大統領に選出されたジョコ・ウィドドは、インドネシアで初めての庶民出身の大統領だといわれる。有権者はこれまでの政治指導者とは異なる「アウトサイダー」による改革に期待したためだと指摘した。しかし、ジョコウィの大統領としての課題は、「アウトサイダー」であるがゆえの脆弱な権力基盤、「強い」リーダーシップとイスラーム的イメージの欠如であった。したがって大統領就任

後は、非エリートの「アウトサイダー」としてのリーダーシップを維持しつつ、権力基盤の強化や維持には強権的ともいえる手法も用いられた。その影で、クリーンな政治や経済的な効率、人権問題の解決は犠牲となってきたという現実について明らかにした。

タクシン、ドゥテルテ、ナジブ、ジョコ・ウィドドは、いずれも民選の政治指導者である。タクシン、ドゥテルテ、ジョコ・ウィドドの 3 名は、「庶民の味方」というイメージを巧みに利用して有権者の支持を得た。ナジブは、首相の権限を強化する制度改正や、野党切り崩しという巧妙な戦術により来るべき選挙戦で勝利することが予想されている。しかし 4 名の政治指導者は、いずれも人権侵害を含む強権性や汚職という問題を抱えている。

では、彼らが有権者から一定の支持を勝ち得るのはなぜなのか。マレーシアについては選挙制度の特徴によるところが大きいが、いずれの国においても、植民地支配期や冷戦期以降の政治経済社会的な負の遺産が存在する。植民地支配期に形成された経済格差や民族対立、冷戦期に米国の支援などを受けて力を増した軍部などである。また既得権益層と一般国民との格差は大きく、タイとインドネシアでは、軍部などの公務員勢力が強固な支配体制を構築してきた。フィリピンでは地方の有力一族が政治経済において独占的な地位を保持し、マレーシアでは華人に対して劣位に立つマレー人の不満が民族間の衝突を引き起こしてきた。

独裁政権から民主化の時代に移行してもなお、麻薬、汚職、貧困などの問題が解決されなかった。従来の民主化論においては、選挙による政権の選択、人権保障、汚職撲滅は相互に関連して進むだろうと暗に想定されていた。ところが現実には、選挙の実施は万能薬ではなかった。虐げられ続けてきた同地域の有権者が望んだものは、民主主義的な理想ではなく、強権による問題の解決であった。また反対に、マレーシアのようにナジブが大規模な汚職疑惑をかけられていても、マレー人の権益を守るために組み上げられた強固な制度を打ち破りにくくなっていた。

しかし、強権政治による問題の解決は、長期的には民主化に対して負の効果をもたらす可能性も否定できない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 16 件)

外山文子著「タイにおける半権威主義体制の再登場—連続性と不連続性」『競争的権威主義の安定性/不安定性 (日本比較政治学会年報第 19 号)』、日本比較政治学会、PP. 84-116、2017 年

外山文子著「タイ立憲君主制とは何か—副署

からの一考察』『年報 タイ研究』第16号、日本タイ学会、PP. 61-80、2016年
外山文子著「タイ新憲法草案に関する国民投票：問題点と展望」『所報』No. 652、バンコク日本人商工会議所、PP. 6-10、2016年
外山文子著「タイの新憲法草案について：特徴と今後の展開」『所報』No. 648、バンコク日本人商工会議所、PP. 17-21、2016年
玉田芳史著「タイにおけるポピュリズムと脱民主化」村上勇介編『「ポピュリズム」の政治学：深まる政治社会の亀裂と権威主義化』国際書院、2018年、PP. 201-230
玉田芳史著「タイにおける籾米質入れ事業と所得再配分政策：ニティが喚起した論争」『国際情勢紀要』No. 88、2018年、PP. 97-107
玉田芳史著「枢密院の人事と政治」『年報タイ研究』第17号、2017年、PP. 1-23
玉田芳史著「タイの2016年国民投票：新憲法と軍政継続」『国際情勢紀要』vol. 87、2017年、PP. 131-149
玉田芳史著「タイの脱民主化：2014年5月22日クーデタへの序曲」『国際情勢紀要』vol. 86、2016年、PP. 145-172
玉田芳史著「タイにおける脱民主化とナショナリズム」『アジア研究』61-4、2015年、PP. 42-60
日下渉著「「ピープル」の敵は誰か？——フィリピンにおける腐敗、貧困、犯罪の敵対化」村上勇介編『「ポピュリズム」の政治学：深まる政治社会の亀裂と権威主義化』国際書院、2018年、PP. 237-251
伊賀司著「マレーシアにおけるメディア統制と与党 UMNO の起源—脱植民地期のマレー語ジャーナリズムと政治権力」『東南アジア研究』京都大学東南アジア地域研究研究所、2017年、PP. 39-70
伊賀司著「現代マレーシアにおける「セクシュアリティ・ポリティクス」の誕生—1980年代以降の国家とLGBT運動」『アジア・アフリカ地域研究』17号1巻1、2017年、PP. 73-102
伊賀司「書評：中村正志『パワーシェアリング—多民族国家マレーシアの経験』」『東南アジア研究』54巻2号、2017年、PP. 279-282
Tsukasa Iga, “Malaysia in 2014: Crisis of the Opposition.” ASEAN Political Outlook 2015 (Faculty of Political Science, Thammasat University), 2016, PP. 33-46
伊賀司「ポスト・マハティール期マレーシアにおけるSNSの政治的影響力」神戸大学国際協力研究科『国際協力論集』23巻2号、2016年、PP. 85-108

[学会発表] (計8件)
(国際学会)

Ayako Toyama, Political Conflict and Independent Organizations in Thailand: the Analysis regarding Selection of Committee Members, チェンマイ大学主宰

セミナー “過去10年のタイにおける司法積極主義” organized by Chiangmai University, Chiangmai, Thailand, 2016年4月22日 ※タイ語

Ayako Toyama, Political Conflict and Independent Organizations in Thailand: the Analysis regarding Selection of Committee Members, Thai Seminar “Democratization and Judicialization of Politics in Thailand”, organized by ASAFAS, Kyoto University, Kyoto, Japan, 2015年12月13日-14日 ※タイ語

Ayako Toyama, Political Accountability in Thailand: Institutional Problems of Constitutional Independent Organization, Consortium for Southeast Asian Studies in Asia, Kyoto, Japan, 2015年12月11日-12日

Ayako Toyama, Political Accountability in Thailand: Institutional Problems of Constitutional Independent Organs, 2nd AAS-in-Asia Conferences/Association for Asian Studies, Taipei, Taiwan, 2015年6月22日-24日

(国内学会)

外山文子、日本タイ学会第18回研究大会プログラム、於九州大学、2016年7月3日、「タイ新憲法草案と国民投票に関する解説と展望—ミーチャイ版憲法草案、憲法裁判所と独立機関を中心として」※タイ語

外山文子、日本比較政治学会2016年研究大会、於京都産業大学、2016年6月26日、「民主化と独立機関：タイとインドネシアの独立機関人事の比較」

玉田芳史、日本比較政治学会2016年研究大会、於京都産業大学、2016年6月25日「タイにおける司法クーデタとその政治的影響」

外山文子、東南アジア学会第95回研究大会、於大阪大学、2016年6月4日、「タイ立憲君主制とは何か—副署からの一考察」

[図書] (計2件)

外山文子、日下渉、伊賀司、見市建(編)『21世紀東南アジアの強権政治—「ストロングマン」時代の到来』明石書店、全264頁、2018年3月刊行

大野拓司、鈴木伸隆、日下渉(編)『フィリピンを知るための64章』明石書店、全408頁、2016年12月刊行

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

外山文子 (TOYAMA, Ayako)
京都大学・東南アジア地域研究研究所・
連携講師
研究者番号：50748118

(2) 研究分担者

玉田芳史 (TAMADA, Yoshifumi)
京都大学・アジアアフリカ地域研究研究科
教授
研究者番号：90197567

日下渉 (KUSAKA, Wataru)
名古屋大学・国際開発研究科・准教授
研究者番号：80536590

伊賀司 (IGA, Tsukasa)
京都大学・東南アジア地域研究研究所・
連携講師
研究者番号：00608185

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者